
ゴールドラッシュ&ゴールドエンエイジ

白金桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴールドラッシュ&ゴールデンエイジ

【Nコード】

N4877BA

【作者名】

白金桜花

【あらすじ】

ロボット＋西部劇＋世界大戦前夜な混沌とした世界。

そんな時代でアメリカの南北戦争が終わって数年後、まだその火がくすぶってる中、

英雄ホリディ大佐の娘キャロルががんばって戦い抜く話です。

その1（前書き）

最初の最初、こっから最後まで製作日数2ヶ月で書き上げました。
今後ちまちま手直しを加えつつ投下したいと思っています。

その1

自由と正義を賭けた南北戦争も既に終結して5年、アメリカも戦火から復興して、破壊された蒸気列車の車両網は徐々に修復されてきて、私たちの済むニューヨークも徴兵騒ぎとかあって昔は一人で散歩ができないぐらい危なかったけど今はすっかもうり平和。

私の名前はキャロル・ホリデイ、パパはあの北軍の英雄にして最強の蒸気仕掛けの5mの有人鉄巨人である蒸機鎧スチーム・アーモアの使い手とされるジョン・ホリデイ大佐、

私自信も民生品の蒸機鎧を用いたレース……スチームレーサーの東海岸グランプリにて去年全国一位を取るぐらいの……ま、見事なまでの蒸機鎧乗りのサラブレッドって所ね。

そんな私が通うのはニューヨークのマンハッタンにあるアイアンハート高校、しっかしまあ本当にお嬢様高校って名前じゃないわよね……

実際お嬢様学校じゃなくてごく普通、レベルも普通の学校だけど、これは単に、パパがたたき上げて若い頃は士官学校で勉強して指揮官になってそれで更に蒸機鎧を駆って前線で英雄と言うべき活躍をした……

要するに努力の人だから華やかなお嬢様学校なんて見学したらその後にか家で吐いてしまつてそして私にこう言ったのよ。

「あんな所に居たらキャロル、お前の性根も腐ってしまう、高校はせめて普通の学校に行ってくれ」

真顔でそう言われた時は当然私は反発したわ、ママもちよつと文句の一つ二つ言っただけどパパは譲らない様子で学費はビタ一文出さないとまで言いだしたから仕方が無く、こんな普通の高校暮らしなのよね……ま、退屈じゃないからいいけど。

そんな私は今日もいつも通り朝起きてゆっくり食事を食べて、そうしていたらママに「もう行かないの？」って言われて時計を見て、いつも通り結構きつい時間だったから慌てて茶色のブレザーとチェックのスカートが可愛い制服に着替えて顔を洗い、

鏡できちんと金色のウェーブヘアーに青いくりつとした瞳、そばかすがチャームポイントの眼鏡の美少女が居るのを確認して、それで家の庭にある蒸機バイクに乗る。

学校まで向かっている道には肌にあたる風が心地よく、ヘルメットが暑苦しいのを除けばバイク通学は悪くない。

バイクはまだ世の中に出たばかりで、一種のお金持ちのステータスみたいな所があるから珍しがるクラスメートはいいとしても、盗もうとする子まで来るのが困りものなのよね……ま、そんなのは私の自慢のアイキドーでぎったんばったんにねじ伏せたけど。

そうして私はすぐに学校にたどり着く。

「あ、キャロル姫今日も遅刻寸前？」

学校の自転車置き場にバイクを置くと、陽気な女の子の声が後ろから返ってくる。

声の主はリン・ファオン、チャイナって所からの移民みたいで黒い髪が凄い神秘的な雰囲気の子ね。

「ええ、何時もギリギリ、でもギリギリでも送れなきゃ問題ないでしょう？」私はにっこり笑って彼女の冗談を返す。

「あはは、さっすがお嬢様だ……大物だねえ」

「大物は私のパパよ？」リンにそう返し、私はすたすたと教室まで向かう、懐中時計を見ると、残り時間はあと5分、走ればいける、そう考えた私はすぐに校内に入る。

既に教室内に生徒たちは入っているのか、廊下に人の気配はない。

ヤバイ、そう私は感じ全力で走り抜ける、行き先は1年のAクラス、ドンドンと足を進め、進め、進め、そして階段を駆け上がりその看板が見え、そこに入る扉の前を通り過ぎそうになり急停止、転びそうになるけどバランスを保ちそして扉をガッと開いて――

その瞬間黒板消しがガッと目前に飛んできて、私の顔面にクリーンヒットし、体制を崩した私はそのまま倒れた。

「遅いぞお姫様！もう10分オーバーだ！」きつい男の声……私の担任、ジークベルグ先生の声が聞こえる。

10分オーバー、それが意味することはただ一つ。

セツトしてあった目覚まし懐中時計の時間が思いつきりズレていたということだった。

その2

「このように、蒸機鎧というのは過去の文明で作られた蒸気機械であり、現にイングランドの>ナイト・オブ・コルブラント<やイタリアの>セイント・オブ・アスカロン<など、古代文明により作られた蒸機鎧を改修し、軍事利用していたことは歴史を語る上で欠かせないでしょう」

歴史の先生が蒸機鎧乗りならだれでも知っているような話を続ける、コルブラントやアスカロンなんて有名すぎてクラスの全員が知っているだろうに、と私はあくびをしながら思う。

「古代文明の蒸機鎧を改修したものを真作鎧、それらを解析し作ったものを贋作鎧と言って、近年発達した蒸気文明により大量生産が可能になってますよね、北軍を勝利に導いた>ウェスト・オブ・ピースメーカー<とか、あれも贋作鎧なんですよ」

そんな事誰でも知っている、それこそ異世界から来た人間でもなきゃと思ってしまう。

もったこう、東洋の国ジパングの職人が真作鎧に負けじと魂を込め作った>サムライ・オブ・マサムネ<や>スピリット・オブ・コテツ<等のワンオフ品の名贋作鎧とか、

コルブラントと>デスペラード・オブ・テイルヴィング<のデザインや機能の酷似性等の話題をしないのかしらと考えてしまうけど、結局高校じゃ無理よねと自己完結をしつつ、ノートに黒板の内容を書き写す。

そんな退屈な授業が終われば昼食の時間に私は何時もの友達と一緒に学校の外にあるレストランで食事を始めた。

あったかい野菜たっぷりのフィッシュバーガーが私の好物、肉は苦手なのよね硬くて。

「でさ、ナルとジントができてるって本当？」リンが一緒に来ていたアム・マクスウェルに問いかける、アムは学校の情報を収集するのが趣味で、ついた綽名が地獄耳、敵に回せば怖いのが、味方に回せば頼りになる奴ね。

「んー、できてるっていうかもう結婚秒読み？卒業したら一緒にジパングに行くんじゃない？」

ジントというのはリンとは違う、極東のジパングからの留学生、堅苦しいけど誠実な男って感じで、軍人の家計みたいで成績も優秀、こんな学校になんで来たか謎なぐらいの優等生よ。

「ジパング……チャイナの方はイングランドの傘下だけど、植民地化を拒んで大反抗をしてるのよね……」リンが色々ジパングに思う所があるのか複雑な顔を浮かべる。

ジパングはユーラシアの国家が連合を組み、イギリス主導で開国を求めようとした、ジパング政府を収めるトクガワ家はそれを？み、開国するかに思えた矢先、ジパングの各州でクーデターが発生、

電撃的に政府を奪い取り、ユーラシア国家の駐留する飛空船団に蒸機鎧で襲撃をかけ撃破したというニュースはこのアメリカにも知れ渡った。

そのニュースによる衝撃的な内容は飛空船団の壊滅に蒸機鎧が使われた所、通常蒸機鎧は跳躍しても10mしか跳べない、カノン砲を持てば撃墜できるけど、このニュースでは写真つきではっきりと蒸機鎧が「飛んでいた」のが問題だったの。

飛行可能な蒸機鎧は真作鎧なら何個もある、だけど写真にははっきりと普通の贋作鎧とおぼしき機体がカタナと言われる刀剣で破壊しているところを捉えており、それはそう、ジパングの蒸機鎧技術がアメリカやユーラシアよりも進んでいるという事でもあった。

つまり、軍事力に関しては上と言って良いほどの連中にユーラシアは喧嘩を売ったわけね、結果ジパング国内は沸き立ち、むしろ白人による支配解放を名目にフィリピンやアジア各国の白人企業に対し攻撃を始め、

解放した地域の人間と遺志の疎通を図り、大規模なアジア圏の武装勢力を築き上げ、今チャイナはユーラシアから来た白人たちの最期の砦と化しているって話よ……ま、お父様曰く、植民地を圧迫しすぎた自業自得らしいけど。

実態は単に、ジパングの人間が白人になり代わってるだけなのだと私は思うわ。

アメリカはこの戦争に参加するように要請され、南軍はそれを支持していたが北軍は拒否、結果南軍にはユーラシアから大量の支援が来たけど、

それが仇となって、またユーラシアに隷属する気かと反発した南軍の人間が大量に裏切り、指揮系統が崩れた所を叩かれ南軍は潤沢な補給があるにもかかわらず劣勢になり、南北戦争は終結した。

当然、圧勝ってわけにもいかず戦費を使いすぎた私達北側はそれを口実に参戦拒否、噂だけどアメリカの自由と尊厳を守る精神に乗っ取り、ジパングに大量の軍事支援をしてる話まであるわ……パパに聞いたら鼻で笑われた、その程度の話だけど。

「さながらアジア大戦ね……」私はこの状況を形容するに相應しいと思った言葉を言う。

「ま、アメリカは中立って言ってんだしジントもスパイで捕まってる、別によくね？」そうアムはあっさりした感じで言う、確かにどうでもいい、外国同士の戦いでアメリカは参戦する気は無いから。

私が興味あるとしたら、ジパング製の蒸機鎧に凄く乗ってみたいというだけ、それも名贋作と言われたものに、真作鎧に匹敵するスベックを持つという贋作鎧、それが300年前から既にあったと言われる話、私みたいな蒸機鎧大好き子にはたまらない話題ね。

だから私はこう思う、ぶっちゃけジパングと同盟組んでジパングの蒸機鎧をとっとと輸入してほしいと。

そうすればパパが試し乗りに買ってきたのを乗れて、このニューヨークの空を飛んで回れるかもしれないからだ。

その3

午後の授業は体育が2時間連続、体育は得意な私は男子顔負けの成績をドンドン出し、

それが終わったら私はバイクで帰宅しようと、バイクにキーをかけようとする。

「あ、キャロルー」そんな矢先にアムが私の方に駆け寄ってくる音が聞こえた。

「何？」私はアムの方を向くと、後ろにはリンも居た。

「ん、買い物行かない？新しいグッズ店見つけたのよ」にっこり笑いながらアムは言う。

「新しいお店ね……いいわね、行きましょう？」別に帰ってもやる事なんて本を読むぐらいだし、

今日は蒸機鎧の訓練の日じゃない、要するに暇な日だった私はアムの誘いに乗る。

「うんうん、持つべきものは友達よねえ」リンが納得した様子を浮かべる。

「……生憎だけど、私は何も買ってあげないわよ」うん、こういう時のリンの態度はわかりやすい、

何か奢ってもらうつもりだと察した私は、釘を刺す。

「う、ケチー……」むーっと膨れるリンを気にせず、私はバイクのエンジンを切った。

街中にバイクなんて置いたら一瞬で盗まれるからである。

そうして私達は、ニューヨークの繁華街に向け足を進めた。

繁華街はいつもいろんな人が居る、多種多様な移民で構成されるアメリカ、

それも南部の奴隷解放運動の後は黒人やアメリカの原住民であるインディアンも町でちらほら見かけるようになった、

私はどうでもいいけどテレビじゃそれに対する反感を持った、元南軍の人間が犯罪を行っている話をよく聞くのは憂鬱ね。

…

……

………

「うー、バイクで行けばよかったわね」かれこれ繁華街を一時間ぐらい歩いている気がする私は、いい加減バイクに乗っていけばよかったと後悔する、

どうせ鍵を壊せる人間なんて居ないし、蒸機鎧を使って盗もうものならすぐバレるからだ。

「あはは、キャロルのバイクなら荷物持ちもできるしね？」リンが笑って返す。

「そうね、でもそれにしても一体いつつくの？」

「あー、これから路地裏に曲がるわけよ」

「路地裏？」アムの言葉に嫌な予感がする、路地裏は治安がかなり悪く、スラム化している場所もそれなりに聞くからだ。

「大丈夫大丈夫、スラム化してる場所は通らないって」アムは私が心配したのを察したのか、笑って返す。

本当に大丈夫なのだろうか、そう思いつつも私達はアムの案内通り、路地裏に足を進める。

路地裏は薄暗く、ニューヨークの高層ビルの間でありまだ日は登っているというのにまるで夜のように不気味だった。

「本当に大丈夫なの？」私は再度、アムに聞く、いくらなんでも雰囲気が悪すぎだと。

「大丈夫だって、キャロルってホント、そういう所はお嬢様なんだねえ」にやにやとアムは笑う。

確かにホリデイ家は戦争の英雄で私の家はお金持ち、良く言えばアメリカンドリームの体現者、悪く言えば成金、まあアムにとってはどっちでもどうでもよく、私はお金持ちのお嬢様なんだけど。

「リンも言ってあげてよ……」前を進むリンに私は声をかける、流

石に嫌な予感がする、アイキドーは確かに優れた武術だけど、体格差がある相手と闘うのはそれでも危険だ。

「心配しすぎだって、大体アイキドーがあるなら大丈夫でしょ？」
ダメだこれは、そう私は実感した、こうなれば毒も食らわば皿まで、そう考え、周囲を見回し警戒する。

見回すと後ろに一人、堀の深いラテン系の、小太りの体格のいい中年男性が居た、男はコートを着込んでおり、葉巻に火をつけ、私と目をあわせたがすぐに目を逸らした。

それ以外に特に人の気配は無く、達は私は路地裏の奥に置くにと進んで行く。

進んで行く途中、空が何かに覆われたのか更に暗くなり上を見上げたら、そこには巨大な8つの可動式ジャイロを側面に搭載した飛空艇が飛んでいた。

「凄い低空飛行だねえ、キャロル、何処のか知ってる？」リンは私に聞いてくる。

「私の専門は蒸機鎧よ、だからどこの飛空艇かは解らないわ？」正直に私は返す、と言うか、何で私が飛空艇について知っているって思ったのか謎だ、

ひょっとして私って格闘技大好きな軍事オタクのように見られているのかしらと思ってしまう。

飛空艇が通り過ぎたのを確認すると、後ろからガサツと言う物音が聞こえた。

咄嗟に後ろを向く。

さっきの、小太りのトレンチコートの中年男性が居た。

彼はゴミ袋に足をぶつけ、私の視線に気づくとさっと顔を逸らし、今度は変な板みたいなのを触っていた。

尾行している？そう私の直感が告げる、だが、何が目的かはわからなかった。

「ねえ、リン、アム……」私は2人に声をかける、尾行されているとしたら人さらいかもしれない、そうになったら最悪……うん、凄い考えるのも嫌な事態になっちゃう。

「何？宇宙人でも見たの？」リンだ。

「ち、違うわ、後ろの男の人……その……さっきから私をつけてるみたい」

「……あのおじさんが？」リンは特に怖気づかず、後ろに居る男に指差す、男は特に動じることなく、またあさつての方向を向き葉巻を吸っていた。

「うん、何かわからないけど人さらいかもしれないわ」

「ホント、怖がりねえ……じゃ、こうしようか」アムも危機感の無い、あきれた様子で語る。

私も少しその態度には怒りたくなったけど、ここで怒っても意味が

ないので、怒りを堪える。

「全力であたしが走るから、リンとキャロルはついてきてよ……はい！ 3、2、1、スタート！」そうにこにこと笑みを浮かべた後、走り始める。

「ま、待ってよー！」リンもそれを追っかける形になる。

「ああもう！ ちょっと！」置いてけぼりになったらまずい、私もそれに続け2人を追いかけるために走り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4877ba/>

ゴールドラッシュ&ゴールドエンエイジ

2012年1月13日21時00分発行